



高西小だより

学校教育目標

夢を切り拓く
心豊かで
たくましい子ども

H23, 7, 8(金) 校長:古屋 N07

梅雨明け間近の蒸し暑い日々が続く今日この頃ですが、朝、あいさつを交わす子どもたちが手にするカブトムシやクワガタを見ると本格的な夏がもうそこまでやってきていることを感じます。

さて、7月に入り、すでに半ばを迎えようとしています。授業参観、懇談会、親子学習会、それに日常の暑さ対策のための水筒や帽子、プールカードへの記入のための検温等、様々な教育活動にご支援とご協力を頂きまして誠にありがとうございます。

1学期の登校日があと10日となりました。学習のまとめにも力が入る期間でもあります。子どもたちが、元気に登校できますようご配慮をよろしくお願いいたします。



プール最高!(1年生)

全ての食物は、生き物から作られている!

「食べることは、命をいただくこと」、「私たちは、命をいただいて、命をつないでいる」ことを、子どもたちに伝えたい!

今、学校では、各学年とも農作物を育てる学習が盛んに行われています。さつまいも、米、大豆、オクラ、スイカ、トウモロコシ、ポップコーン、ピーナッツ、ピーマン、二十日大根、インゲンマメです。今年度は、5年生の米づくりの山本林仁さんや地元農家の皆さんは勿論ですが、4年生の大豆づくりには、北杜市の産業観光部食と農の杜づくり課の浅川裕介さんと営農たかねの原晴雄さんにコーディネートして頂き、中村組合長さんをはじめ、たくさんの方々から教えてもらっています。また、1年生と2年生は、「はつらつ農業担い手事業」の一環として、中北農務事務所の職員の方々から種蒔きから丁寧に教えてもらっています。お陰様で、どの学年の作物も順調に育っています。これから草取りなど田や畑の管理が大変ですが、収穫の時の喜びを楽しみにして頑張りたいです。

さて、昨今は原発事故や食中毒による食の安全が大きくクローズアップされていますが、私たち人間は、食わずして命を繋ぐことはできません。自らの手で農作物を育て、そして食することを通して、「私たちは命をいただいて命を繋いでいる」ことを学んで欲しいと思います。夏休みには、各家庭で「できること」を通して、「食」について取り組んだり、話し合ったりしてみてください。



糸に沿って畝を入れるんだよ。



2個ずつ蒔くんだよね。



どうしてこの大豆の種は赤いの?

学校給食の歴史あれこれ!

- 日本最初の学校での給食—明治22年(1889年)山形県鶴岡市 私立忠愛小学校
・学校を建てたお坊さんが、おむすび、焼き魚、漬け物を出したそうです。
- 学校給食の開始—昭和22年(1947年)東京・神奈川・千葉で連合軍司令部のもとに試験的に開始され、アメリカの慈善組織ララ(LARA)からの援助物資やユニセフからの脱脂粉乳(粉ミルク)が使われました。そして、昭和29年(1954年)には「学校給食法」が制定され、義務教育において、すべての学校で学校給食が始まりました。
- 食育基本法—現在の食生活の乱れ、栄養の偏り、生活習慣病、食の安全、食物の外国への依存等を背景に、「知育」「徳育」「体育」を支えるのは、健全な食生活の実践が不可欠であるという考えから、「食育」の重要性を示した法律です。平成16年(2004年)に制定されました。

鈴木三重吉の「赤い鳥」と高西小の学校文集「やまばと(山鳩)」

「赤い鳥」は、夏目漱石の弟子であった鈴木三重吉が創刊した童話と童謡の児童雑誌です。1918年に創刊され、日本の近代児童文学・児童音楽の創世期に最も重要な影響を与えました。当時、鈴木三重吉は、政府が進める唱歌や説話に対し、子供の純性を育むための話・歌を創作し世に広める一大運動を宣言して「赤い鳥」を発刊したのです。創刊号には芥川龍之介、有島武郎、泉鏡花、北原白秋、高浜虚子、徳田秋声らが賛同の意を表明し、その後、菊池寛、西條八十、谷崎潤一郎、三木露風らが作品を寄稿しました。また、北原白秋は「赤い鳥」において、自作の童謡の発表を行いながら、寄せられる投稿作品の選者として重要な役割を果たしました。

この児童雑誌「赤い鳥」に、当時の村山西小の子どもたちの作品が、創刊から4年目の第7巻第2号(大正10年8月号)に初めて掲載され、大正11年には、57編が掲載されました。その後、昭和7年3月までの長期にわたって投稿し、児童詩教育の先進的の学校として教育実践を行ってきたのです。

この中で、初めて掲載された第7巻第2号には、小尾ゆき子(尋常6年)さんの綴り方「まり」が掲載されました。大切にしていた猫を死なせてしまった、わたしの気持ちが書かれた作品です。この作品には鈴木三重吉が「応募総数千六十一通の中から選んだ」とし、「小尾さんの『まり』は、この人のすべての心持ちをよく書き表しています。中に出てくる色々な人の性格や動作もはっきりと描きだされております。(中略)ところどころでことばを切ることをしないで、ああしたら、そして、かうしたら、というふうに、のべつに続けてかく癖がありますね。小さなひとにはそんな風にかく方がラクなのでせうが、あんまり長く引つぱるとお話が、さも、だらだらしてるやうに見えます。なるべく、かうした、かうした、そしてかうした、という風に、言葉を切っておかきなさい。」と評しています。(※昔の表現で書かれています。「かうした」→今の表現は「こうした」)

小尾ゆき子さんの作品は、「赤い鳥」に数多く掲載されましたが、その中でも翌年の高等科1年の時には

「蛙」 藤原よし子
 廣いたんぼに
 おれ一人、
 ねいま(苗代)のあせで、
 朝の蛙が、
 ないていた。
 ※峡北地方では、女性が「おれ」という言い方もした。

「蛭」 櫻井壽秋
 草の上を、
 蛭がぐづぐづ
 あるいてた。
 見たら頭が、
 赤かった。
 ※ぐづぐづ…わさわさ…表現。ウの音の響きを生かす。

左記のような素晴らしい作品が掲載されました。

他の多くの作品は、藤原よし子さんや櫻井壽秋さんの作品のように自然を素直に見つめたもので、意図的に方言を使うこと等によって、素朴さと詩のリズムがつけられたようです。

現在も本校では、「やまばと(山鳩)」という学校文集が作られており、創刊は昭和24年で、本年度で通刊63号に

「花の船」 小尾ゆき子

ゆさゆさ船の
 なゝかまさん、
 ありのせんどろ
 目がまはる。
 つぎの港のをばさんに、
 今度の日曜にやねえさんと、
 おきやくにいくと
 ゆつておくれ。

(解説)
 ナナカマドが真っ赤に色づいて葉を落とす。小川の流れがゆらゆら運ぶ。その葉に乗った蟻の船頭に語りかけるのである。「今度の日曜にあ姉さんと…」

問を置きたくない、に等しいが、句切れにしたい所………無印
 問を置きたい所………読点(、)
 大きな切れ目………句点(。)

句読点の使い方は、他の村山西小の子どもたちの作品も同様だったようです。

なりますが、何と「赤い鳥」に初めての投稿・掲載された大正10年(1921年)から数えて丁度90年目になります。大正から昭和初期の時代は、自由主義教育という言葉で表されるように、それまで行われてきた学校教育が、少しずつ改革され、特に文化芸術の面で大きく進展した時代と謂われていますが、こうして当時の子どもたちの心を綴る教育が、伝統的に永々と引き継がれていることをとても誇りに思うと同時に、学校だけではなく、保護者の方々や地域の皆様のご支援とご協力の賜と深く感謝致します。(※今回の「赤い鳥」と「やまばと」との関わりは、溝口克己氏(現明野中校長)が、平成元年に今後の国語教育のあり方を研究するにあたり、「赤い鳥」における山梨県下の小学校児童詩教育の姿を調べ、その研究の成果をとりまとめた論文から記述させて頂きました。山梨県下の小学校では、村山西小の他に、鳳来小、小淵沢小、道志小も投稿・掲載されていたということです。)

「早寝・早起き・朝ご飯」「あいさつ運動」「宿題・家庭学習」「聞く・話す力の向上」を推進しています！家庭でのご協力をよろしくお願いします。